

## 論文審査の結果の要旨

氏名：大 山 智 子

博士の専攻分野の名称：博士（芸術学）

論文題名：ヴェーベルンの音楽が響き渡る絵画空間—ニコラ・ド・スタール《コンサート》論

審査委員：（主 査） 教授 大 庭 英 治

（副 査） 教授 大 熊 敏 之 教授 福 島 唯 史

教授 川 上 央

本論文は、20世紀フランスの画家ニコラ・ド・スタール（1914–1955）の最後の大作《コンサート》が、作曲家アントン・ヴェーベルンの美意識といかに通底しているのかを明らかにするものである。これまでの《コンサート》に関する先行研究では、「カンヴァスに音楽的印象を置いた」、「動きと音楽に優れている」、「音楽のハーモニーが含まれている」など、観者が画面から感じ得た音楽的印象のみが論じられており、造形表現に沿った厳密な比較検証の成果を示す論考は見られなかった。サラ・バーベデットが2014年に発表した最新の先行研究著作である『コンサートの詩学』ですら、ド・スタールの《コンサート》についての多岐にわたる分析は試みられてはいるものの、「具体的な絵画表現の中では音楽性は反映されていない」と論じるのみで終始している。

これに対して本論は、ド・スタールがヴェーベルンの楽曲を聴いた直後から制作を始めたという事実を踏まえ、《コンサート》の画面にみられる造形表現の特質がヴェーベルン音楽と共鳴する性格のものであることを着実な調査・研究のもとで実証的に論究するものとなっている。

論者は学部生以来、長くド・スタールの芸術、ことに《コンサート》を頂点とする「音楽」をテーマとした諸作品に惹かれるなかで、自身も「音楽」をテーマとする絵画作品の制作を学部卒業制作、大学院博士前期課程修了制作、そして現在にいたるまで継続している。その過程で、ド・スタールの絵画にそなわる「音楽性」、とりわけ大作《コンサート》における音楽的な表現のありようとは何なのかという問題意識を強く抱くようになり、それを解明すべく、博士後期課程に進んでからは、邦語、英語文献はもとより、仏語、独語文献にいたるまで数多くのド・スタール関係の先行研究を渉猟、批判的読解を重ねるとともに、《コンサート》を所蔵するフランス、アンティープのピカソ美術館での詳細な作品実見調査で得られた成果に基づき、絵画制作者としての自身の知見をも十全に活かしつつ、ド・スタールの作品のマチエールのあり方、コンポジションの取り方、色彩の対比について深く考察を進めた。さらには、音楽奏者でもある両親の薫陶を受けて身につけた読譜能力を用いて、ヴェーベルンの楽曲の総譜分析にも取り組み、ド・スタール作品の「音楽性」に影響を与えた音楽家アントン・ヴェーベルンの存在の重要性を論理的に確信するに至っている。

本論文の第1章では、ニコラ・ド・スタール（以下ド・スタール）の作品の変遷を辿り、《コンサート》に繋がる表現の特質と、この画家の美学を明らかにしている。形体と色彩の純化の進展が彼の作品の変遷からうかがえるからである。そして具象絵画から抽象絵画、半具象から半抽象絵画へと作品が変化するに従い、輪郭、色彩の対比、絵画空間の表現などが純化し、ド・スタール独自の世界が構築されていったと論じている。

第2章では、「20世紀音楽」と「絵画」との関係性を概観し、そのうえでド・スタールと音楽との関係性を考察しているが、まずは彼の全作品の中から音楽をモチーフとした作品を抽出し、音楽的な表現の共通性を明らかにしている。さらには1950年にピエール・ブーレーズとの知遇を得たのちの作品の変化についても言及している。そして本質的には相容れないと思われていた美術と音楽が交流する時代の中で、ド・スタールの持つ音楽への深い理解と情熱とが相まって、作品に大きな影響を与えたと指摘している。その影響について論者は、「音楽」を主題とする作品の中で音楽的印象は色彩となって現れ、やがて色彩は特徴的な「色彩の対立法」により豊かに調和し、「色彩＝音色」、「形体＝リズム」、音とリズムを画家の感性を通して色彩のコントラストで対立させた「色彩のコントラスト＝音楽」という、類比的表現を構築したと論じている。さらに、演奏者と楽器の形体は次第に同化してゆき、最終的に演奏者の姿は画面から排除され、象徴的な楽器

のみが絵画空間に集約され、制作へと続いていったと論じている。

第3章では、《コンサート》について詳細な作品分析を行い、あわせて先行研究の問題点をも指摘し、それぞれを精査し考察している。その結果、《コンサート》における構成要素であるピアノ、コントラバス、楽譜、背景の赤は、静物画と風景画の統合を経て再構成された「絵画空間の創作」の中にあつて、色彩と形体、絵画空間の調和を目指しながら統合された美意識であると論者は考え、そこからヴェーベルンの音楽との関わりに言及している。そして《コンサート》の着想はヴェーベルンの音楽に対する感動がもたらしたものであり、ド・スタールはその音楽の美意識に共感した、つまり「音楽的印象」を生み出すことになったのだと述べている。

第4章では、《コンサート》の背景の「赤」についての根本理由の解明を試みているが、まずド・スタールの作品には、これまで「赤」を主題として用いられたものが数多くみられると論者は指摘している。そして「赤」という色彩は衝動やエネルギー、感動や美しさであり、ド・スタールのもっとも信頼する色彩であり、それはまた透明性、堅牢さ、エネルギー、躍動、静止など豊かな表現力を持っているのであり、それがヴェーベルンの音楽への感動への証となったと述べている。

第5章では、《コンサート》の絵画空間に如何にヴェーベルンの美意識への共鳴が表現されているのかを具体的に提示している。これまで論じてきたド・スタールとヴェーベルン両者の美意識に共通するのは何かを挙げ、それらを作品と重ね合わせ、《コンサート》に具体的に表されたヴェーベルンの「音楽的な性格」の表現を考察している。そして、両者の美意識が同じ地平線上に存在し、「自由な表現への希求」、「要素の単純化と精緻な配慮」、「沈黙の間」、「情感」という四つの美意識が、両者に共通する抒情的な世界観を作り上げているのではないかと述べている。そして《コンサート》は、ヴェーベルンの音楽に誘発された感動から出発し、ヴェーベルンの音楽が鳴り響く空間として描かれたもの、つまり「ヴェーベルンの音楽が響き渡る絵画」なのだと言者は、説得力ある論証を経たのちに、過不足無く結論づけることに成功している。

本論文は、論者のド・スタールの作品に対する敬愛から生まれたものである。そして彼の初期の具象的な作品はもとより、抽象、半抽象の作品に至るすべての作品が、論者のこれまでの作品制作の土台となっている。とりわけ博士後期課程在籍最後の冬となる2020年12月には、本論文執筆と並行して制作に挑んでいた、ド・スタールの《コンサート》へのオマージュともいえる縦 3.1メートル、幅 6.5メートルに及ぶ大作《Jazz Orchestra》を「博士課程創作成果 大山智子 展」で発表してもいる。このような、実制作とともに美術史学研究にも真摯に取り組んでいる造形作家大山智子氏の研究論文「ヴェーベルンの音楽が響き渡る絵画空間 — ニコラ・ド・スタール《コンサート》論」は、今後のド・スタール研究のみならず、20世紀西洋美術史研究への大きな指針となり得るものと考えられる。

よって本論文は、博士（芸術学）の学位を授与されるに値するものと認められる。

以上

令和3年2月1日